アジア神学の可能性と方法－森本あんり著『アジア神学講義』を読んで－

芦名定道

一　「アジア神学」とはいかなる問いか

本書の目的は、表題にあるように、「アジア神学」（＝「アジア的な文化背景を自覚的な文脈としたキリスト教神学」一頁。以下引用頁は頁数のみを記す）を明確な仕方でテーマ化することであり、著者は、まず日本における「アジア神学」の現状と意義について説明することから論を始めている。その指摘によれば、「日本では、ヨーロッパやアメリカの神学は相変らず紹介も研究もされているが、アジアの神学はその大部分が邦訳すら存在しない状態である」(一)。この神学における「欧米捕囚」の状況は、キリスト教思想に限らず、日本の思想界全般に認められる問題であって、こうした現状の中でアジア神学を取り上げるのは、アジア神学は「実は神学にとって無視することができない根本的な問いを含んで」おり、「アジアの神学は、その異化作用によって、われわれがふだん気づかずにもっているいくつもの基本的な前提の所在を自覚させ、これを問い直す力をもっている」(三)からに他ならない。つまり、欧米捕囚に陥っている日本のキリスト教神学がこの自らの状況を自覚化し相対化するために「アジア神学」は重要な手がかりを与えてくれる。これが、アジア神学を論じる意義なのである。

本書はこうした問題意識に基づいてアジア神学を主題的に取り上げるわけであるが、アジア神学を構想する上で問われるべき問いを明らかにして論を進めている点にこそ、本書が日本のキリスト教思想研究に対してなした最大の貢献を認めることができるであろう。何を問うべきかを明らかにし、それを明確に定式化することは、「道案内も少なく、多くが問われたばかりの未熟な若い問い」(一三)を扱う上で、重要なポイントだからである。序章の「３　授業風景から」 ── 本書は、プリンストン神学校での著者の講義に基づいている ── に示されているように、著者は次のような周到に準備された問題設定から議論に着手している。

三つの具体的な目的を挙げた。

１　多様なアジア神学の豊かさと深さに接すること
２　そこで神学にとって本質的ないくつかの問いが発せされているのを見ること
３　自己自身の神学的文脈を特定してこれに反省を加え、自分の神学構築の出発点となすこと　(一四)

したがって、本書はこれらの課題がいかに遂行されたのかという点から評価できるのである。

以下この書評では、本書に含まれる多面的な問題連関の内、アジア神学の可能性に関わる事柄に論点をしぼって議論を行いたい。本書はその四つの章からなる本論において、四人の神学者の思想を精密かつ批判的に分析しているが ── この分析において著者は優れた力量を示しており、このテーマに関する日本の第一人者と言える ── 、これらの論評については、他の書評者にお任せし、ここでは主に議論の視点あるいは方法論に関わる序章と結章を取り扱うことにする。

二　「アジア神学」を問う枠組みあるいは方法論

著者は、アジア神学を論じる際に、「状況とメッセージ」の相関構造という枠組みを用いている。これは、「神学は常にメッセージと状況という二つの極からの張力を受けつつ営まれる」(九)との言い方からもわかるように、アジア神学に限らず、キリスト教思想一般の枠組みと言える ── この枠組みは現代神学で広く受け入れられている ──。以下、状況とメッセージに分けて、著者の説明を手がかりにこの神学的思惟構造を検討してみよう。

まず、状況の極であるが、これは、本書では「文脈化」として論じられる。神学は、神学者が立つ特定の文脈において構築されるのであり、それゆえアジア神学とは、「アジア」という文脈において構築された神学ということになる。しかし、文脈化とはアジア神学特有のものではなく、「欧米のこれまでの神学は、実は自己の文脈的出自を自覚しないでいるにすぎない」、「文脈化」は、「すでに自己自身のキリスト教理解において起こっている事実なのである」(七)。これは重要な指摘であり、ここから「『純粋なキリスト教』というものはどこにも存在しない」(七)、「啓示は常に文脈の中で生起する」(八)ことが確認されるのである。アジア神学を論じることは、キリスト教神学にとって、自らを規定する解釈学的構造を意識化する手がかりとなり得るのであって、アジア神学はキリスト教神学全般にとって決定的な意味を有しているのである。

しかし、文脈化に関しては文脈化の具体的形態の適切性が問われねばならない。それを論じるには、状況＝文脈化と相関するもう一つの極、つまりメッセージに議論を移す必要がある。ここで著者が取り上げるのは「伝統」概念である。文脈化を行う際に、キリスト教神学は、伝統との連続性を保持することが必要になる。なぜなら、「こうした過去との連続性を何らかの接点において確保する努力なしには、それがキリスト教の一部であるという保証もなくなってしまう」(二六)からである。伝統こそが、「個人と共同体にアイデンティティの源泉を提供する」(二七)ものであって、メッセージはこの伝統によって媒介されるのである。

以上より、アジア神学（神学一般もまた）とは、文脈化と伝統という二つの要素から構成されることが判明するが、神学にとって重要なことは、文脈化と伝統の二つの契機が適切な仕方で統合（相関）されていることなのである。「伝統は共同体に結合力と持続力を与え、その歴史的継続性を保証するが、まさにそうであるために、伝統は常に新しいものに対して開かれていなければならない」(二八)、「アジアの神学は、それ自身が狭義の伝統への挑戦でありつつ、同時に広義の全体教会がもつ伝統の自己変革機能の一部を担っている」(三〇)。本書の本論から一例を挙げるならば、アンドリュー・パクに関する、「伝統的な原罪論が語ろうとしてきた内容の真理を、恨の理解によって新たに表現し直そうとしているのである」(五四)との議論において、「伝統的な原罪論が語ろうとしてきた内容の真理」は「伝統」の極に、「新たに表現し直す」は「文脈化」の極に相当していると言えよう。

三　そもそも「アジア」「アジア人」とは

次に、「アジア神学」を論じる前提である「アジア」理解について見てみよう。まず、著者はこの点について、「中国漢字文化圏」(一五)、「中国、韓国、日本という三つの国からなる東アジア文化圏」(一四五)に範囲を限定した上で、アジアの多様性を指摘する。「アジアの神学」といっても、「国や地域によってその状況はさまざまである。アジアの

諸国・諸地域・諸文化は、『アジア』という簡単な括り方を拒絶する多様性をもっている」(一一)。しかも、この多様なアジアは歴史的変動の中にある。こうした点を総合して考えるならば、アジア神学の文脈であるアジアについて、次のような重層構造を考慮しなければならないことがわかる。「『文脈化』の努力をより注意深く検討するならば、その対象はいずこにあっても決して一枚岩ではない。韓国の宗教文化だけを取り上げても、その基底には道教、儒教、仏教、シャーマニズムなどが相互に絡み合い影響を与えつつ流れている」(一八五)。

以上のアジア理解は、さらに「『アジア』とは、最終的には地理的な概念であるよりは歴史的な概念である」(二一二)として展開されることになるが、ここで書評者の私見を述べるならば、アジアを歴史的概念と考えることから帰結するのは、アジア神学の内容を論じる際に欧米列強の圧力下におけるアジアの近代化という事態に留意しなければならないということである。「貧困と抑圧と搾取という不正義の現実を目の前にしている第三世界の神学者たち」(一四五)という視点は、多様で変化しつつある歴史的アジアを論じる上で不可欠の視点なのである。

アジア神学に関して、次に論じるべきことは、神学の主体と聞き手（＝アジア神学において誰が誰に語るのか）の問題、つまり「アジアにおける神学」の起源、由来となる「『アジア人』とは誰か」(一三九)という問いである。たとえば、ジュン・ユン・リーについて、彼は「『アジア系アメリカ人』という自己認識を明確にしており、その著作も『欧米の読者』を対象に書かれている」(一四二)と言われるが、そうであるならば、リーの神学は問われるべきアジア神学の中で一体いかなる位置を占めているのかが問われねばならないであろう。私見を述べれば、おそらく、本書で扱われるアジア出身で主に欧米で活躍してきた四人の神学者たちが英語で書いた神学思想は、アジア神学の一形態、一部分であって、アジア神学とは、アジア出身の神学者が母国で母国の読者に対して書いた神学や、あるいは欧米生まれの神学者がアジアにおいてアジアの言語でアジアの読者に対して書いた神学をも含むものと考えられねばならないのではないだろうか。アジア神学のアジア性は形式的にだけでなく、むしろ文脈化の内実（アジアの固有性？）から判断されねばならないのである。その場合、日本人神学者が日本語で書いた神学も、内容次第では十分にアジア神学と評しうることになるであろう。

四　コメント

最後に若干の批判的コメントを行うことによって、この書評を閉じたい。

本書を通読した最初の印象は、充実した序章に比べて結章がもの足りないというものであった。それは、本書が意図的に（？）、問題提起することに力点をおいており、それに回答を与えることは必ずしも第一義的には目指していない、ということなのかもしれない。たとえば、結章で、著者はアジア神学を整理するためビーヴァンスの類型論を検討する際に、「われわれが見た四人のアジア神学者たちは、そしてわれわれ自身のなすべき神学構築の努力は、どの類型に属するであろうか」(一九五)と問うているが、この問いについて、著者自身の見解はほとんど示されていない。著者自身の見解をもう少し聞きたかったというのは、書評者一人の感想であろうか。これは言い換えれば、アジア神学をめぐる著者の立場と文脈が見えないということである。著者は過去の日本キリスト教における日本化を

批判しつつ、「キリスト教の意欲的な日本化は、これらの事例が示す限り、少なくとも数の上では何ら有意義な結果を産み出さなかった。日本という文脈で神学の構築を志す者は、この事実に留意すべきである」(一六)と述べている。では、日本人としての「われわれの文脈化神学」(一九四)に関して、著者は何を提示するのであろうか。著者は公正な議論を目指すあまりに、自己の立場を主張するに禁欲的であると評すべきであろうか。

本書の内容については、個々の記述に関して、疑問な点も少なくない ── たとえば、序章三一頁以下の「正統」概念を論じる意味や、結章で扱われる「二重信仰」の議論など ── 。しかし、個別的な論点に先だって問われるべきは、「なぜ」に関わる問いである。著者は、序章の「１　なぜ『アジアの神学』か」で、日本の神学が翻訳神学を越えるために、「アジアの神学」に眼を向けることの必要性を説いた。しかし、真に「アジア神学」を問うためには、何よりもアジアの視点から、「なぜ、アジア（先に述べた歴史性を有する）においてキリスト教なのか、なぜ、神学なのか」を問う必要があったのではないか（cf. 大木英夫著『組織神学序論』教文館、を参照）。本論で扱われる四人の神学者は、この「なぜ」の問いとの関わりで何を語っているのであろうか。

このようなコメントをした上で、最後にわれわれが留意すべきは、本書によって、アジア神学への一つの明確な切り口が示され、問われるべき問いが提示されたからには、この出発点からさらに議論を前へ進めて行くことこそが、われわれに問われているということである。アジア神学の可能性について、今後さらなる議論の展開がなされることを期待しつつ、筆を置きたい。